

ナショナルバイオリソースプロジェクト「カタユウレイボヤ等リソース拠点整備」

第3回運営委員会 議事録

1. 日時 2009年9月28日(月) 14:00-16:00
2. 場所 筑波大学下田臨海実験センター
3. 出席者
佐藤 清 (NBRP 事務局長)、中島 紫 (NBRP 事務局員)、山崎由紀子 (NBRP・遺伝研)
野中 勝 (運営委員長:東大)、星 元紀 (運営委員:放送大)、西駕秀俊 (運営委員:首都大)
稲葉一男・笹倉靖徳 (筑波大)、吉田 学・近藤真理子・幸塚 愛 (東京大)
4. 議事
 - 1) 筑波大学の平成20年度業務の実施内容について説明があった。系統の収集は目標値の20系統に達したこと、のべ提供数も目標の10回を超え44回に達したこと、同一研究グループへの繰り返しの提供が多いこと、MTAの取り交わしを2008年12月より進めていること、トランスジェニック系統の特徴をユーザーに公開するデータベースCITRESを国立遺伝学研究所の山崎由紀子先生の協力の下作製しホームページ上で公開したことが説明された。
 - 2) 筑波大学でこれまで収集した系統のうち2系統が同一のトランスポゾン挿入を持つ系統であることが判明し、今後は一つにまとめて提供する事が伝えられた。これについて、同一挿入を持つ系統がある理由について質問があり、同一挿入を持つことが示されるまでは別系統として扱われる例があるとの回答があった。
 - 3) 筑波大学で収集された筋肉のGFPマーカー系統の一つが事故により失われたこと、新たな系統の入手を進めること、またその完了までは他の筋肉マーカー系統で代用していくことが説明された。事故の経緯について質問があり、遺伝子組換え体の封じ込めのために使われる過酸化水素水の誤導入であることが説明された。事故防止策を講じる必要性の指摘があった。
 - 4) 平成20年度のカタユウレイボヤ・野生型提供の業務について説明があり、約20,000匹のホヤが提供されたこと、純系・近交系は第5、6世代が得られたことが説明された。
 - 5) 京都大学の扱っている野生型について近親交配が進んでいるため変異が蓄積している可能性があり、野生集団個体と交雑させることを了承した旨が説明された。

6) 京都大学でこれまで進められてきた純系・近交系に関する業務について、筑波大学と東京大学で引き継ぐことが説明された。これについて、筑波大学では京都大学から第5世代と第6世代の個体を引き継ぎ、順調に生育し、第6、7世代目の幼若体が得られていること、今後は AFLP 等により遺伝マーカーの整備を試みるということが説明された。東京大学では京都大学からの一度目の提供個体が死亡したため、第6、7世代目の幼若体を、再度提供を受けて飼育を開始している旨が説明された。

7) 純系・近交系について、系統によっては性成熟個体が急に縮んで死亡する例があること、特定の血統において出現するため餌などの問題ではなく遺伝的なものである可能性が高いことが報告された。

8) 純系の必要性について質問があり、純系が完成し提供が進められれば利用が見込まれるとの説明があった。また純系を複数系統作製できればポジショナルクローニング等の実験を進める上で強力であり、そのような体制を整えることにより利用を促せるとの意見が出された。

9) 平成20年度のニッポンウミシダの提供業務についての説明があった。成体、固定幼生サンプル、組織断片、cDNA を提供していること、提供数・提供先の一覧が報告された。また平成21年度の提供業務（提供数、提供先）の説明があり、去年度の同等時期より多いことが説明された。

10) ニッポンウミシダの提供先について、研究機関への提供を増やすための工夫をするべきとの指摘がなされた。学会などでの広報活動に努める旨の回答があった。また、ホームページにおいて、どのようなリソースコンテンツがあるのかがわかりにくく改善すべきとの指摘がなされた。

11) カタユレイボヤ/ニッポンウミシダのホームページの利用者数についての報告があった。月平均 200-250 のアクセスがある。特にアクセス数が著しく伸びている訳ではないため、アクセス数を増やすための工夫が必要との指摘がなされた。

(文責：野中 勝)